



木のおもちゃを 福島の子どもたちに 贈呈

ニュース コープしが

2013年11月26日、コープしがの役職員が福島県を訪れ、福島市とコープふくしまへ、木のおもちゃを贈呈しました。



コープふくしまでの贈呈式の様子。

12年9月に福島市民会館(福島市)の1階にオープンした遊び場「さんどパーク」で贈呈式を行ない、木のおもちゃ170個、どんぐり、松ぼっくり、お菓子などを贈りました。その後コープふくしまの店舗コープマートいずみに移動し、「子育てひろば」で使用するための、木で作られたトラックのおも



福島の子どもから届いたお礼の手紙。

ちゃ5台を贈呈しました。

これらは、コープしがの子育てひろばに木のおもちゃを納品している、社会福祉法人 湘南学園 れもん会社(滋賀県大津市)で作られたものです。

コープしが組織部の須戸伸治すののぶはるさんは、「13年6月に福島を訪問した際、子ども向けの屋内施設が次々オープンしていることを知りました。またそこで使われる2歳児以下向けのおもちゃが少ないことを知り、ぜひプレゼントしたいという話になりました」と贈呈の経緯について話します。

式には、福島市の職員や園児、コープふくしま、コープしがの役職員、れもん会社社員が出席。れもん会社社員が子どもたちにおもちゃを手渡すと、子どもたちは笑顔で喜んでいました。

餅でつながる気持ち 京都から宮城県 南三陸町へ 京都生協

ニュース

京都生協は、京都でついた餅を宮城県南三陸町志津川でふるまう、復興支援餅つきを11年より実施しています。



京都生協本部で行なわれた餅つき。大勢が集まった。

13年11月24日には、京都生協本部で第3回目の復興支援餅つき大会が行なわれ、組合員、役員とその家族、そして毎回一緒に企画を運営している鳥取県畜産農協の職員ら約60人が参加しました。東日本大震災で被災し、京都で避難生活を送る方も招待して、交流も行なわれました。



「海の虹プロジェクト」に参加した南三陸町の中学生たちも応援に駆け付けた。

24日についた餅は、11月30日に南三陸町まで運ばれ、当日、京都生協の職員ボランティアと鳥取県畜産農協、現地のみやぎ生協ボランティアがついた餅と合わせて、仮設住宅の住民や漁協の組合員らに提供されました。また、夏に京都生協が行なった、南三陸町の中学生を京都に招待する「海の虹プロジェクト」に参加した地元の中学生も、今度はボランティアとして応援に駆け付け、バーベキューを担当しました。

京都生協の福永晋介ふくのしんすけさんは、「3回目の実施となり、現地で顔なじみの人も増えました。夏の『海の虹プロジェクト』で訪問した京都府綾部市からも、ボランティアが車で南三陸町まで駆け付けてくださったりと、京都と南三陸とのご縁がどんどん深まっています」と話していました。



ニュース

訪問をきっかけに 被災地域の 商品取り扱いを検討 富山県生協

富山県生協は、13年11月21日、22日に行なった福島県内被災地域へのバス訪問企画をきっかけに、被災地域の商品の取り扱いの検討を始めました。

訪問企画には、組合員・役員19人が参加し、案内役をコープふくしま常務理事の穴戸義広（しんご）さんをはじめ、3人の理事が務めました。

訪問企画の一環で、相馬市の復興に取り組み「NPO法人 相馬はらがま



浪江町を訪れる参加者ら。浪江町は、13年4月に一部の地域に立ち入り許可されるようになったばかりで、復旧すらなかなか進まない状況だ。

朝市クラブ」が運営するコミュニティスペース「直売所「報徳庵」に立ち寄り、高橋永真（ながはし）理事長に話を伺いました。高橋理事長からは、若者が戻ってくる明るいまちをつくるため、朝市の開催や商品販売を行なっていることなどのお話がありました。

こうした話を聞いて、富山県生協は宅配事業で、相馬はらがま朝市クラブが提供する商品の取り扱い検討。支援に向けての一步を踏み出しました。

訪問企画を立てた富山県生協の松本亮祐（まつもと）さんは、「復興に向け何ができるかを考える第一歩は、現状を正しく知ることからです。今回の企画が、新たな活動につながりうれしく思います」と話していました。



写真前列右端が相馬はらがま朝市クラブの高橋理事長。「ここ報徳庵、復興の拠点としたい」と力強く話されていた。

被災地からのメッセージ

全国の皆さまへ

富山県南生協 理事 近内正子（こんないまさこ）

原発はおそろしいものです。なぜもっと強く反対してこなかったのか、私は心から後悔しています。全国の皆さまにも反対していただきたいと思います。



そして、元の福島に戻ってほしいと思っています。福島は、美しいところです。住みやすく、人もやさしい町です。特に白河は私が大好きな町です。でも、原発事故によって、この美しい福島は壊されてしまいました。

地震や津波などの自然災害は、防ぐことができません。

でも、原発の被害は人災であり、防ぐことはできたはずですが。悔やむことばかりで、今でも涙が出ます。

白河にも仮設住宅がたくさんあり、私たちも訪問させていただいて、傾聴ボランティアなどを行っています。仮設のくらしは不便ですが、時間はかかっても家は建ちます。でも、放射能はいつ消えるのか、まったく先が見えません。

一方で、震災と原発の事故がなければ、生協の真の素晴らしさに気付くことなく、ただ理事の仕事をするだけだったかもしれません。このことは感謝しています。

そして、全国の生協の皆さまからは、変わらぬご支援をいただいていることは大変ありがたく、感謝しております。今後どうぞよろしく願い申し上げます。

メッセージ全文は、日本生協連「復興支援ポータルサイト」内、「つながろうCO-OPアクション情報」ボタンをクリックし、ご覧いただけます。「日本生協連 復興支援ポータルサイト」でインターネット検索を。



福島県南生協では、募金で運営資金を集め、仮設住宅住民向けの保養企画を実施。

リサーチ「被災地のいま」

高齢者の暮らし

復興の見通しが立たない中、長引く仮設住宅での暮らしの影響などで体調を崩す高齢者が増えています。そのような状況の中で生協は、事業や組合員活動を通して高齢者の暮らしを支え続けています。

長引く避難生活に 体調を崩す高齢者が増加

2013年12月4日で、東日本大震災発生から1,000日がたちました。復興どころか復旧すら進んでいないという声は依然として多くあります。

各自自治体が提案した集団移転先の宅地は163戸分で、全計画戸数の1%未満。また、災害公営住宅の建設は397戸で計画の16%にとどまり、今後迅速な整備は難しいようです(読売新聞・11月下旬調査)。

不便な仮設住宅でのくらしや不安により、体調を崩す高齢者も増えています。

厚生労働省の要介護・要支援認定者の増加率の調査結果によると、11年5月末と比較して13年5月末には、岩手県が12.0%増(7万996人)、宮城県が18.8%増(10万459人)、全国ワースト)、福島県が14.3%増(9万8,881人)となっており、これはいずれも全国平均(11.3%増)を上回っています。

震災で家族や家、仕事を失ったことで生きがいをなくし、引きこもりがちになってしまう高齢者の健康問題は深刻です。今後は孤独死や自殺も増えることが危惧されています。

生協の特長を生かし 高齢者を支え続ける

こうした高齢者を取り巻く現状に対し、多くの生協が支援活動を広げています。

医療生協さいたまでは、13年9月よりいわて生協と協同し、毎月第4金曜日に岩手県大槌町の仮設住宅で、健康チェック活動を行なっています。この取り組みは広がりを見せ、現在、神奈川県と東京の医療生協が宮古市、新潟と長野の医療生協が釜石市、群馬と栃木の医療生協が陸前高田市で同様の活動を始めています。

また医療福祉生協以外でも、さまざまな生協が、高齢者に向けた体力的に負担の少ない企画を工夫を凝らして実施しています。仮設住宅でのサロン活動での軽い運動の実施や、日帰りで温泉などに出掛けるリフレッシュツアーの開催、芋煮会や餅つき大会などが喜ばれています。

また、仮設住宅は高台にあることが多く、自動車を運転できない高齢者や障がいのある方にとっては、買い物な



いわて生協の移動店舗「にこちゃん号」。沿岸地域を4台の「にこちゃん号」が走り、買い物に行くことができない高齢者の役に立っている。

どの日常生活も困難な場合があります。

こうした状況を受け、いわて生協、みやぎ生協、こーぷふくしまでは、発災後、移動販売車による販売を始めました。その運営には、募金やノウハウ提供などでさまざまな生協が協力をしました。各生協の担当者からは、「移動店舗は単なる販売ではなく、コミュニケーションのきっかけとしても大きな役割を果たしている。特に引きこもりがちな高齢者にとっては、孤立もある程度は防ぐことができるのでは」といった声が聞かれます。

「助け合いの組織である」「事業がある」「集まる場を大切にする普段の活動がある」といった生協の特長を存分に生かした活動が、被災地域の高齢者の大きな支えとなっています。

(文 荒川和巳)